

宇治の眺望

——源氏物語終末論のためのノオト——

村 井 利 彦

(一)

匂・紅梅・竹河の三帖の順序および位置に関しては議論がある。しかし私は、現行通りの順序で読むべきだと思う。それは、橋姫までに至る世界の展開が、六条院という原点から徐々に遠のこうとする運動としてとらえ得る点を重んじたいからである。勿論、紅梅・竹河でも竹河・紅梅でも私の立論には左程の影響はないのだけれども、我々読み手の心理の流れに卷々が呼応するというデリケートな配慮を、現行の巻の順序が示すとすれば、やはり触れておかねばならぬ。

匂宮巻は、六条院。紅梅巻は、「故致仕の大臣の二郎」で「亡せ給ひにし衛門の督のさしつぎ」である按察大納言邸。これは、この巻が、従前、六条院物語の一方の舞台であった致仕の大臣の後日譚であることを明示する。そして、竹河巻は、鬚黒邸。これは、かつて光源氏・致仕大臣（内大臣）に次ぐ第三の男、今は亡い鬚黒の世界の後日の物語。さらに続く橋姫巻は、須磨・明石の沈淪から光源氏が京都に復活した時、自動的に栄華の世界から追われた政敵の晩年の物語。と、案じてゆけば、源氏物語が、その流れとして、光源氏の近親者の世界から、ゆるやかにではあ

ても確實な足どりで、疎遠な世界に向けて出てゆく様が、その親疎の度合を追って段階的に描かれていることが解るであろう。さらに橘姫巻の場面が、八宮の京の邸が焼かれ「移ろひ住むべき所の、よろしきも」ないままに宇治の山莊に移った所から薫のいる世界の時間に接続するところとなることによって、この親疎の觀念が地理上の遠近にまで響き合う構成は無視されるべきではない。

というのは、この、遠ざかうとする運動が、母を尼姿に変えてしまった六条院ならびに致仕大臣邸のある世界に背を向けて、宇治に向かつてゆく薫の行動を少なくとも自然なものとする効果は見逃すことが出来ぬ故である。

妙な言い方をすれば、薫は、自身と母をこんな悲遇に陥らしめた光源氏の世界の外の世界を求め求めた揚句（玉鬘の長女への彼の恋情もこの方向でとらえたく思う）の果てに、一番遠い場所、彼は、悲遇の根源をなす秘密に出逢うということなのである。この出逢いが劇的となる理由である。

(二)

光源氏の世界から最も遠い地点に、その世界を滅ぼした秘密が無傷のまま保存されていて、その秘密の申し子待ちうけている、という大筋を成立せしめるための積極的な割振が与えられるのが竹河巻である。というより、偽作説まであるこの竹河巻こそが、この宇治十帖の悲劇を、光源氏の世界が持った女三宮の、つまりは、藤壺の暗い論理に結びとめてしまふのだ、と言ってよい。

匂宮、紅梅の両巻は言われるように、それぞれ、薫・匂の紹介のための巻で、光源氏なき後、彼にかわり得る者はこの二人しかいないことを、光源氏時代の生残りの人々に証言せしめる巻である。その証言は「匂兵部卿、薫る中将」

と「聞きにくく言ひ続ける」「例の、世の人」と差異はない。匂宮巻における夕霧、紅梅における按察の大納言、全く然りである。同じく証言者の位置に立つことになる竹河巻の玉鬘はどうか。彼等二人とは明らかに異なる。何故なら、玉鬘は、薫に光源氏を発見する以上に、兄柏木を発見しているからである。

元旦の夕暮れ時、夕霧と入れかわって現われた薫を、ちょうど御念誦堂にいた玉鬘が御簾の前に招いた時の彼女の所感は、

おとゞ（夕霧―私注）は、ねびまさり給ふまゝに故院に、いとようこそ、おぼえたてまつり給へれ、この君は、に給へる所も、見え給はぬを、けはひの、いと、しめやかに、なまめいたるもてなしぞ、かの御若盛り、思ひやらるゝ。かうざまにぞ、おはしけんかし（傍点筆者）

である。勿論彼女は光源氏が母夕顔に没頭していた「御若盛り」の頃を知るはずがなく、かの御若盛り云々は、逆に「似給へる所も見え給はぬ」の条文を強調するためにあるにすぎぬ。この文章構造を理解し、さらに同じ正月の「廿餘日」、「梅の花盛り」の日、中門の傍に佇んでいた蔵人少将をひきつれて、「西の渡殿の前なる紅梅の木のもと」に薫が現われ、「故致仕の大臣の御爪音になむ、かよひ給へる」と聞く玉鬘の所望を容れて、彼が「心にも入らず、搔きわた」した時の彼女の泣き乍らの言葉、

おほかた、この君は、あやしう、故大納言の御有様に、いとようおぼえ、琴の音など、たゞ、それこそ、おぼえつれ

に出逢うに及べば、我々は、彼女の役柄を、夕霧や按察大納言と同位のものとして処置することが出来なくなろう。かつての六条院の花形として光源氏の世界の奥深く入ったことのある彼女、そして薫の実父とは血を分けた兄妹で

ある玉鬘であるからこそ可能なこの証言のもつ説得力が、はっきりと、薫をして罪の子としての位相を源氏物語上に確定せしめるのだ、と言えよう。

私は、このことゝ、この巻の冒頭の草子地は無関係ではないと考える。すなわち、竹河巻の、従前の語り手と違った語り手の口から出た物語、しかもその話手が、「源氏の御族にも離れ給へりし、後のおほとこのわたりにありける悪御達の、落ちとまり残れる」人々であったとする設定が、この巻全体を暗い異聞の世界として位置づけしてしまうのであり、竹河巻をして、匂・紅梅の二巻を、綺麗事づくめの晴とすれば、明らかに、身も蓋もない、その美麗な舞台の楽屋内の醜聞に充ちた衰のものとして、源氏物語世界の「闇の論理」つまり藤壺の時間に、厳しく薫大將を結んでしまう点を十分に確認しておく必要がある。次巻橋姫は、全くすっぱりとこの竹河のしいた時間の内部に含まれた巻なのであり、我々がこの竹河という世界を度外視して、この京を離れた別世界に対峙し得ないからこそ、橋姫の後段に配せられた弁尼の「問はず語り」が強烈なアクセントをもって立ちあらわれるという読みを押えておきたく思う。

竹河巻後半におかれたところの、中納言になって「御悦びに」やって来た薫に玉鬘が、娘達、特にかつて薫も思慕を寄せたことのある大君の現在の不如意な日常を嘆息まじりに語った時の、意外なまでに冷静な彼の返答、

更に、かうまで思すまじきことになむ。かゝる御交らひの安からぬことは、昔より、さることなり侍りにけるを。位を去りて、静かにおはし、何事も、けざやかならぬ御有様と（冷泉ハ―私注）なりにたるに、たれ（秋好ヤ弘徽殿女御）も、うち解け給へるやうなれど、おのゝ、うちゝには、いかゞ、挑ましくも思すこともなからむ。人は、何の咎と見ぬことも、わが御身にとりては、恨めしくなむ。あいなきことに、心を動かい給ふこと、女御・后

の、常の御癖なるべし。さばかりの紛れもあらじ物とやは、おぼし立ちけん。たゞ、なだらかにもてなして、御覧じ過ぐすべきことに侍るなり。

の中には、京都における人間関係への疲れと宇治という空間をもった彼の日常が交叉し乍らも、この世俗をいとう心が彼を宇治に導入しているのだという、宇治十帖を読む前の心得が用意されていると言えないか。この返答に、「せっかくなぐさめていたゞこうと思っていましたのに」と笑っている「人の親にて、はか／＼しがり給へる程よりは、いと若やかに、おほどいたる心地」のする玉鬘の気配に、薫が、

みやす所（大君ノコト）も、かやうにぞ、おはすべかめる。宇治の姫君の、心とまりておぼゆるも、かうざまなるけはひの、をかしきぞかし

と思った時、この竹河にある彼の初恋が、全く彼をして、宇治に追いやった事情を明解し、薫のもつ求道者の風貌に、意外なまでに恋の挫折者の陥る見馴れた風景をその後景として与えるのも、口さがない「悪御達」の「問はず語り」でこの巻があつたればこそではないか。こう考えて来る時、私は、薫同様、この大君に激しい恋情を炎やす藏人少将の姿を、うはべはさもつれない薫の内奥の影なのだととらえている宣長の立体的な把握を思うばかりである。次に描かれる宇治大君への薫の消えることのない思慕は、この竹河の予行によって鮮やかに縁どられている点を思念すれば、竹河巻偽作説、さらには無用論に関する興味は、にわかに減退してゆく、と言わざるを得ない。

(三)

源氏のおとゞの御おとうと、八の宮とぞ聞えしを、冷泉院の、春宮におはしましし時、朱雀院の大きききの、よこ

ざまに思しかまへて、この宮を、世の中に立ちつき給ふべく、わが御時、もてかしづきたてまつり給ひける騒ぎに、あいたく、あなたさまの御なからひには、さし放たれ給ひにければ、いよく、かの御次くになり果てぬ世にてえまじらひ給はず、また年頃、かゝる聖になりはて、今は限りと、よろづを思し捨てたり。

という八宮の紹介文は、愛妻に光源氏のように先立たれ、その残した二人の娘の世話に、後妻もゝらわず明け暮れる京都の生活の最後、つまり彼が宇治の山荘に居を移す直前におかれている。これによつて、我々は、この条文以前の、橋姫巻に描かれた部分が、実に、六条院の長く続いた時間の外側をうめるものであることを諒解することになる。源氏物語は、明らかに須磨・明石の両巻のあたりから地上の榮華の方向に屈折してゆくのであるけれども、その曲り目に、この宇治の八宮の世界を挿し継いでいることは考慮しておく必要がある。それは、光源氏がロマンを求めてさまよつた遠心力の働く場から、獲得したロマンを保持してゆこうとする求心のそれへの転進という源氏物語の従前の筋道の、その前者の復活として読める、ということである。六条院という地上の榮華の極みを描き切ったこと、しかもそれが、紫上というロマンの結晶を悲劇の場に立たせる結果しか来たさなかつたという事実^にに象徴される如く、様々な女人の様々の悲哀、なかならず光源氏の屈辱的な晩年の決定が、六条院総批判の運動を引き起す。その動きが宇治十帖の世界においてはきわめて簡潔に素早く濃縮された形で実現してゆくだけでも、その動きの対象である世界が、六条院以前の、しかも六条院とは全く反対の志向を持っていた昔懐しい世界を承けるという当然すぎる暗合がそこにあるかと思われるからである。

瑣細な事ではあるけれども、かゝる源氏物語の構造が、私は、その内的流れを日常の時間に結びとめて押し流してしまうことを拒絶するという、つまり物語が物語の時間を保有し独立を目指す運動を引き起こすことに着目したい。この

点で、源氏物語は、物語が地上の時間の流れを記録するものでしかない歴史の領土から離脱し独立を主張する「物語の空間」に厳しく踏み出そうとしていることを言いたい。短絡な言い方をすれば、源氏物語は、物語を自立させることによって物語を終了させようとしているのである。

ために、源氏物語は、自己の流れを進行せしめる必要があった。すでにこの傾向は、フラッシュバックのよく利いた若菜巻以来のものだが、前巻竹河が、六条院の初期。そしてこの橋姫が須磨・明石、さらに後段の浮舟が夕顔、夢浮橋が首巻桐壺に回帰する。というのが、私の大雑把な展望である。

源氏物語は、言うなれば、うしろに向かって前進してゆくのであり、この奇妙な前進が、源氏物語の時間を、我々の所属する日常の、後戻ることのない「地上の時間」から切り離し、完了するのだ、と言うことになる。この巻の設定は、その意味で重大なのだと考えている。

(四)

薫が八宮の存在を知ったのは、かなり前からであったとしても、彼が直接宇治に向き教えをうけようと思うようになったのは、あまり俗世間に出ず宇治の山中に籠りがちであった「才、いと賢くて、世のおぼえも、軽」くない阿闍梨が、八宮と冷泉院という二つの世界に関与していたからに外ならない。彼はこの阿闍梨の話聞いて八宮を訪ねる決心をしているのである。問題は、物語の展開を巨視した時、阿闍梨という僧が京都に出て冷泉院にゆき、そこにいた薫を宇治につれ出してゆくということにある。しかも、冷泉が、阿闍梨の話、特に八宮の可愛相な姫君の話を聞いた時、

朱雀院の、故六条院にあづけ聞え給ひし、入道の宮の御ためしを、おぼし出で、かの君だちをがな。つれづれな遊びがたきになど、うち思したり

とあることより予測されるように、女三宮事件の状況を十分復活せしめているその世界から僧が薫をひきずり出して宇治にゆかしめるといふ一種の救済にある。が、結果的には、その行き先に、女三宮事件の秘密が無傷で保存されてあつて、二度に亘つて十分に秘密を知らしめられた薫が、現在の、光源氏を父としながらも八宮の兄弟であらねばならぬ冷泉院と同じ型の人生に自己をいれてゆくことになる。という以後の展開を十分考慮して、再度、冷泉院のこの思念に対すれば、明らかに薫の上に血の因果律を負わせしめるところに橋姫巻の主眼があることが了解されるであろう。

そういう一つの流れを心得た上で、この橋姫巻の、例の霧の立籠める有明の月の光の中の美麗な場面を眺めてみると、宇治の姫君達の役柄は、次に現われて、「したゝか」な声で過去を語ってゆく「さだ過ぎ」た巫女かひなまのような風彩の老婆を登場せしめたるための前座であることが分つてくる。老婆とその語りが醜く暗く深ければそれだけその前景は、美しく明るく無邪気であらねばならなかった道理である。

この有明の場の前におかれた三年の空白は薫の道心を保証するものであつて、その有様が描かれてないのは、この藤壺の時間というテーマに狭雑物を入れぬための配慮である。と同時に、その道心が彼の晴れやらぬ心の流露にしかすぎぬものを大きく位置づけることより、秘密を全く完全に知らしめることによって、心の一応晴れた状態での薫の人生そのものを問題にしようという先の用意であつたと考えてよいだろう。恐らく彼の道心が、竹河巻における初恋の破れの投影もあるとする余地は、十分この三年が保証しよう。しかし、作者はそういうものを書くとしていないのである。

初めて噂の姫君を目撃するところとなつたこの有明の場においても、彼の心が姫君に動きはしても、余事を全て捨てせしめる程の没入はなかつた事は、歸つて匂宮に一部始終を語つてゐることで明らかであろう。彼の心を占めたのは、この後入れかわりに現われた老婆の言葉であつたことは次の本文にはつきりしている。

心のうちには、かのふる人のほめかしし筋などの、いとど、うち驚かされて、ものあはれなるに、「をかし」と見ることも、「めやすし」と聞くあたりも、何ばかり、心にもとまらざりけり。

彼がこの姫君に夢中になるのは、秘密を知つた後で、八宮から後事を託されるという、例の柏木からそうされた夕霧のような立場に立つたところからであつて、この世界にあつたこの秘事が、宇治から流布せしめぬためということも一つの動因であつたことは、押えておく必要がある。八宮の死の描かれた椎本の巻には、

中納言の君は、「古人の問はず語り、みな、例のことなれば、おしなべて、あはくしうなど、いひひろげずとも、いと、恥づかしげなる御心どもには、聞きおき給へらむかし」と、推し量らるゝが、ねたくも、いとほしくもおぼゆるにぞ、又、「もて離れてはやまじ」と、おもひよらるゝつまにもなりぬべき

とあつて、彼は父柏木の名譽のために姫君との結婚を考慮してゐるのである。自己の感情にはきわめて忠実な匂の恋と薫のそれとはかなりの距離がある。彼の恋には戦略の臭いがつきまとう。浮舟との場合にはこの臭氣はさらに激しい。致仕の大臣の孫、柏木の子、つまり王統でないからである、と考へねばならないのかもしれない。

(五)

大君の人生への決断が、無論八宮の、浮いた心を夢々使うでない、この地に朽ち果てる覚悟を決めるがよい、それ

が「わが身一つにあらず、過ぎ給ひにし」母の名誉にもなることなのだ、といった訓戒、しかも山寺にゆく最後の言葉となつてしまつたその遺戒の上に立つて言うまでもない。八宮は、さらに、王統の家の「おきて」と矜りを傷つけるような「軽々し」いもてなしをするでないという同様の言葉を侍女達にも残しているのであるから、死に際の人物がとかく裁断的になるといふ世俗的な通例をさし引くにしても、彼の真実言いたかつたことがこれにつきるのだと了解して悪くない。が、彼のこの言葉は、およそこれより一ト月程前、中納言に昇進したばかりの薫が久しぶりでやつて来た時の彼の言葉。

なからむ後、この君だちを、さるべき、物のたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬ物に、かずまへ給へ

や、「後は若い人達にまかせて」と、そこに薫と姫君達を残して仏間に立つていつた時の、薫が聞いた八宮最後の言葉の中の歌

我なくて草の庵は荒れぬともこの一ことはかれじとぞ思ふ

さらに言われた薫も全くその氣になり「領じたる心地」でいるのだから、これらの言葉を按ずれば按ずるだけ八宮の遺戒は不可解なものとなつて来ると言えるかもしれない。がしかし、こゝは、八宮の薫への絶大な信頼が逆に、姫君達への強い要請となつて現われているのだと理解しなければならぬだろう。姫君達のいさぎよい処世は、「心恥かしげなる、法の友」である薫の博大な佛のような慈悲心に応える術なのであるという対応関係の中でとらえておく必要がある。王統の八宮は、兄朱雀院が無類の樂天的な、疑うことを知らぬ無邪氣さで薫の母を光源氏にあづけたように、愛姫を薫にまかせたのである。そして、自身は兄のように山寺にゆき、そして死ぬ。死に水をとつたのは、例の薫を宇治に案内した阿闍梨で、彼は、この死という正念場で、往生要集に書かれた第六章の二の作法通り、恩愛を断

て、世俗を顧みるなど督励する。この阿闍梨の、「にくく、つらし」とまで思わせる冷やかな「あまりさかしき聖心」は、亡き骸を今一度見たいという姫君達の申し出を無下に断った言葉、

今更、なでふ、さることか侍るべき。日ごろも、「又、あひ給ふまじき」ことを、きこえ知らせつれば。今は、まして、かたみに、御心とぞめ給ふまじき御心づかひを、ならひ給ふべきなり

を、十分に押えておけば、このあたりの構造が視界に入つてこよう。八宮はこの導師に人生をあずけるべく努力していた。だから彼は姫君達に「あひ給ふまじき」ことを修業していた。だが我々はそれがなか／＼難渋な道であつたことを八宮が薫に語つた言葉を聞くまでもなく知っている。恐らく、死の正念場のため、いが八宮にはあつたはずだ。

このことは、夢に現われた彼が成仏していないことによつて明らかになつて来るが、この阿闍梨の、少々ヒステリックな言葉や処置からも我々は十分このため、いを推測することは可能である。が、八宮は、その正念場はともかく、少なくとも、山寺という死地に向かう朝、だけは、全く導師の望む決断に達してゐたはずである。と、すれば、彼の最後の遺戒は、その決断の証言であり、阿闍梨の思想と考へてよいだろう。大君は、この遺言に殉ずるとすれば、この大君の頑迷でさえある行為は、「あまりさかしき聖心」の、この阿闍梨の思想によつて裏打ちされているからこそ、頑固であるのだ、と考へられる。さらに、この阿闍梨が、

才、いと賢くて、世のおぼえも、軽からねど、をさ／＼、おほやけごとにも、出で仕へず、こもり居たるに、

と、浄土門のあかぬ前の、墮落しつゝあつた叡山を捨て、さらに山深く道を求めた孤高の僧達の、聖道門の風彩が、この宇治十帖の後段に、同じくこの阿闍梨と対照的な位置が与えられた横川の僧都のはなはだ物解りのよい、人間臭い浄土門の風彩から逆に照らし出されて来ることもあるのだが、この聖道門という選ばれた者達のための厳肅な作

法が、いちじるしく嚴父のイメージに連らなつて来るとすれば、大君の決断は、自己の導師の言を重々理解しつつも、「かう、見讓る人なき御ことどもの、見捨てがたきを、いける限りは、明暮、えさらず見たてまつるを、世に、心細き世の慰めにも、おぼし離れがたくて、過ぐい給へる」という女々しい父親ではなく、導師の思想の、嚴父の論理とも言ふべき定立を背負うという約束であらう。

彼女が死の床にある時、薫と共にそのかたわらに來たその阿闍梨の口から成仏しおゝせなかつた八宮の夢語りがされるという構成は、中君の夫の匂宮の誠実さへの疑惑が決定的な昂まりを見せていた時期に追ひ打つような運びとされて、この大君の死を一しお無惨なものとする。彼女の死は、「父の論理」の死滅を意味しないか。

死に水をとつた薫は、紫上をそうした光源氏や夕霧のように、未だ美しい大君の姿を見つめこそすれ、阿闍梨のように「ぼしお離れるべきことを、きこえ知らせ」はしない。彼女は、自己の容色の衰えを、紫上や朝顔のように気にしつつ、女盛りに向かう妹へ自己の女の夢を転化するという一つの処世をバネとして、父の遺志を守つたのであるけれども、匂宮の來訪のとだえを、愛の薄れと誤解することによって、さらには父の夢語りによって、いはゞ両面から切りくずされて、その戦略が全く挫折してしまふことになる。

父の論理は破れ、中の君は、宇治から川のように流れ出る。

京都は彼女にとって宇治のような平和郷ではない。頼む薫は、仏のような慈悲の領分を超えて、「男といふものの、心憂かりける事」を迫りさえする。そして、この、父の綻てを破つた女が限らない思慕を、そうしなかつた姉に寄せる。この京都における妹の役柄は、母に似、父に似てはいない妹に、父親似であつた姉のイメージを必死に追う狂おしい薫の情念を、八宮に似た異母妹に移行するためのしばらくの媒体でしかない。

徒^{あた}な夫の前で、彼女が、「物怨じしたる、世の常の人」になろうとした時、宇治という京都からはるかに置かれた空間の中の妥協の許されぬ世界の厳しさはもはやない。少なくとも中君は、姉のように誤解によっては死ねない位置にいる。

宇治の、世俗的でなかった時間の流れは、かくて、京都の時間の中に合流し、独自性を失うことになる。浮舟の登場は、宇治の時間の復活にあらう。

(六)

宇治という場所が初瀬詣のための「仲宿り」の場所であつたことは記憶されてしかるべきだと思う。この場所は、平安貴族の旅の宿なのであつて、俗端に言う「旅の恥」がかきすてられる場所であつたという事情が、京都の市中よりはるかに八宮の姫君達への訓戒をして切迫した局面におかしめるのだという場面の効果は宇治ならではのものであるはずだ。そして、山荘の前を流れる宇治川の響きは、とゞまるところを知らぬ時の流れに響き合つて、八宮の離や、大君の衰えてゆく容色への危惧、さらに間もなく女盛りの頂点に向かうであろう豊麗な中君の結婚問題を、未来の不安を拡大しながらせき立て、ゆく効果は絶大であらう。有名な宇治橋断碑の碑文の冒頭、

浼^わ流横流

其疾如箭

は全く、無常迅速、生死事大といった趣に連なっている。

早くしなければ、妹は自分と同じ運命に立つのだという大君の心理を支えるのも、この宇治の流れがあればこそで

あろう。彼女の、妹への後見の位置に立つことへの決断は、父の遺志を自分ひとりにうけとめて、溢れ出た薫への情愛を、妹の人生の中で生かそうとしたものとしてとらえることが出来ようが、匂宮を連れて来た薫や、しのびよる薫に妹を与えて逃げようとした大君の、意外なまでに偶然性を頼んだ性急な行動が不思議な説得力をもつのも、この川を背景にした、無常迅速の雰囲気的缘故ではなかったとは言にくい。

結果として、大君が、父に殉じて死んでしまうことになる宇治十帖の前景を、先に考察した如く、父の論理の挫折、ととらえてゆく時、私はやはりこの断碑の文章にあるところの、道登上人がこの川に橋を渡し

結因此橋

成果彼岸

とした「大願」が果されなかった話として、この橋姫物語をとらえ直すことが出来るのではないかと思う。東から西に向かつて、流れをわたろうとした、かけ橋の折れてしまった物語ではなかったか。自力で橋をかける聖道門の敗北である、と、この大君をめぐる物語を心得ておけば、次に登場する、顔しか大君に似ていない女Ⅱ浮舟の物語を支える世界が、横川の僧都のはなはだ人間的な世界である事情の理由もほゞ見当がつくのではないか。浮舟が、父の論理の中の世界にいる限り、彼女が救われようのない立場にたゝしめられるのは、その世界が彼女と全く逆の人格をもつ大君のもので、大君が真実生き得る世界の中で浮舟が生きよう、というより生かしめられた当然の結末であったのである。

宇治の宿は、浮舟にとって京へ移るための仮りの宿でこそあれ、こゝに住みつかねばならぬ何の理由もない。ましてや彼女が、こゝの主人にボロ屑のように捨てられた召人の子供にすぎなかったのであってみればなおさらのこと

と言わねばならないだろう。彼女が、大君から遠ければ遠いだけ、彼女は大君が父の遺戒を墨守することによって陥ることのなかった世界に陥る宿命にあるのであり、これは彼女が、この宇治という場所に在る限り逃れ得ぬ筋道なのだ、という読みが決定的なものとなれば、ます／＼、この浮舟を生かしうる場が、要請されて来ると言えよう。作者は、この時、浄土門を選んだのである。

源信は、紫式部の時代に、浄土門を十分に開きながら聖道門の道を塞いではない。むしろ価値の力点ということからいえば後者に眼目があると言え言いうると思われる。私は、浮舟を宇治から小野へつれてゆく横川僧都を源信にひきつける読み方にはあまり気のりがしない。少し思慮を欠く僧都その人もそうだが、彼をとりまく状況は、横川という土地を除けば、この読みに全てが不利な証拠となろう。源信を生んだ母は、描かれているような化物めいている人ではない。『今昔物語』に現われる母とは雲泥の差があろう。さらに、盗賊に追い衣で高名な、三千院の往生極楽院にいたという伝承のある安養尼が、亡くなった娘を忘れ兼ね、浮舟をその生まれ変わりだと信じて、かつての婿の中将と添わせようと画策する妹尼であるとは信じ難い。彼女は女人成仏に深く心した御方ではなかったか。

私は、源信の思想の二つの柱が、宇治十帖の前後に置かれているのだと考えてみようと思っている。

この小野の場合は、宇治の阿闍梨の世界のことごとく反対の世界として設定されているのであるけれども、宇治の世界が、八宮と大君を救えなかったように、この母の慈愛に似た、人間味あふれる小野の世界も又、浮舟を救いとりこに成功したとは描かれていない。この設定が、私には、浄土門・聖道門のいずれとも決し得ぬ源信の思想の反映なのであって、未だ親鸞の時代に早すぎ、空海・最澄の時代から遠く離れた「中間の時代」にある仏界の中をさまよう凡夫の姿を明彫するには恰好であったと考えたいのである。

その意味では、宇治十帖全体は、きわめて『現代的なものであった』訳であり、それは読み様によっては、現代の思想――源信への作者の意志表明であったとも言えよう。そして、現代の思想が有効であるとは書かれていない。

(七)

出家して尼姿となった浮舟の未来に、妹尼や大尼君の姿が置かれるということ、特に大尼君の老い惚け食いつきその恐ろしい姿が与えられることによって、彼女の尼生活の未来図がぞろ示される時、彼女の将来は心理的に言えば、尼生活に限って多幸を予想せしめるものではない。彼女は遠い将来、妹尼を経て大尼君に到って処世を終るであろうとするルートが、彼女をしてこの道に長く留まることを許さなくしてしまう。これは一つの心理的な読みである。

そういう立論を思い切って、薫と浮舟の未来図に求めてみると、浮舟の薫に還ってゆく道は全く塞がれていることを認めずにはいられなくなってくる。出奔の時点とは全く逆に、今や浮舟は全く勾宮より薫への愛に傾いているという皮肉な設定にもかかわらず、である。

手習の巻の中將の存在が鍵となろう。

彼の年令は、廿七八、これは、わざ／＼指定されているところだが、薫と全く同じである。さらに、彼は、かつての自分の妻の面影を忘れかねて妻の母である妹尼の許への訪問を欠かさない。そして、浮舟との交渉に昔の夢を再現せんとする。彼の妹尼に対面した時の言葉、

何事も、心にはなほ心地のみし侍れば、山住みも、し侍らまほしき心ありながら、許い給ふまじき人々に、思ひ

障りてなん、過ぐし侍る

は、母の存在故に、世を捨てることの出来ずにいる薫の現代そのまゝではないか。

このことを心得た上で、浮舟出家の後、初めて彼女の姿を見た中将が、その尼姿の美しさに「尼なりとも、かゝるさましたらむ人は、うたても思えじ」として、「忍びたるさまに、猶、かたらひ取りてん」と妹尼をせめて、

行末の御後見は、いのちも知りがたく、頼もしげなき身なれど、さ聞えそめ侍りなば、更に、かはり侍らじ。たづね聞え給ふべき人は、まことに、物し給はぬか。さやうの事のおぼつかなきになむ、憚るべき事には侍らねど、猶、へだてある心地し侍るべき

と、語った時、この「たづね聞え給ふべき人はまことに物し給はぬか」という問いかけを十二分に押えたその上で、浮舟がこの中将と妹尼の申し出を断って仏道に精進し始めたという記述を考慮して、源氏物語の、夢浮橋巻の一番末の文章、

「いつしか」と、まちおはするに、かく、たど／＼しくて、帰り来たれば、「すさまじく、なか／＼なり」と、おぼすこと、さま／＼にて、「人の、かくしすゑたるにやあらむ」と、わが御心の、思ひ寄らぬ限なく、おとし置き給へりしならひにとぞ

に向かう時、こゝにおいて、薫を中将の位置に立たしめて、結局二人は結ばれることはないのだということを構図の上で示そうとしている作者の配慮が知れよう。浮舟が、中将を拒んだということは、今度は妹尼ではなく僧都がすすめることになる薫との結婚への態度をもつゝみ込んで、彼女の人生は薫の世界へ帰ってゆくことはあり得ないということ、薫をして中将の、「たづね聞え給ふべき人はまことに物し給はぬか。さやうの事のおぼつかなきになむ、

憚るべき事には侍らねど、猶、へだてある心地し侍るべき」と同次元の発想、「人の、かくしすゑたるにやあらむ」を吐かしむることによって決定するというダイナミックで説得力のある終り方をしおおせたと考えるべきであろう。

この浮舟の、出口を塞がれた終局、仏道に没入しおおせるでなし、さらばと言って世俗に帰るのでもなし、という不安な終末が、結局は、源氏物語全体の志向を決定しよう。若し浮舟が、出家人道で、めでたく万事にケリをつけたとすれば、源氏物語の全体は、それらが問題をさまざまに展開しつつも、錐のすゝむようにして到達し切り開いた浮舟までの道程を、一人の女を救うための道草としてしまうことになる。『仏の綻て給へる身』と光源氏も薫も言った。しかし作者はそう彼等に言わしめながら彼等の人道して幸福そうな姿を決して描かなかった。そうすれば、彼等の真面目な人生の苦悶が、その結果のための無駄な努力となってしまうからなのであり、描かないのは、その無駄な努力の道程こそが、その苦悶のありようこそが、実に価値そのものなのだという主張がそこにあるからなのである。

その意味では、最後に描かれた浮舟の、不透明な終り方こそが、全くもって源氏物語全体を救っているものであり、源氏物語全体そのものの錐の先に当る彼女の悲劇的な風貌が、彼女をそこまでおいやつたその錐の進んで来た道のりの悲しい失敗を問い直す要請を決定的に主張するのである。

そして終章の、登場人物が等しなみに、母を抱えている構図は、源氏物語の、母を他者の中に求めて来た人間が、結局は、血のつながった最も近い絆である自己の母しか持ちえなくなってしまう姿が、源氏物語の世界そのものを絶望の暗い淵にたたき落してしまわずにはおかないのであり、人と人とを結ぶ糸が血のつながりでしかないという戦慄的な人間存在の孤独の究極が、そうなるには未だ間のある、おゝよそ一世紀にわたる群像のドラマチックな絆のまさぐり合いの暗い動きを支える台座となることを確認したいと思う。

この厚く深い群像のドラマの中に、紫上という全くもって少女小説の主人公のようなあどけない一回的な夢があるということ、そして作者が必死になってそれを書いて護っているらしいこと、私はそれを面白いと思う。運命の圧倒的な力の流れを示す悲劇の構造を全く支えおおせているのが全く微小な夢のかけらなのだという逆理を私は信じてみたく思っているのである。

